

5

MAY

- 1 [月] GRUPPO FRESCO #03 World Music Tour !!!◎PLAT アートスペース
- 4 [木・祝]—5 [金・祝] とよはしアートフェスティバル2017『大道芸 in とよはし』◎PLAT ほか
- 6 [土] 第26回 豊橋東高等学校吹奏楽部 定期演奏会◎PLAT 主ホール
- 6 [土] ドラマティックピアニスト はちまん 正人グロトリアンピアノコンサート
◎PLAT アートスペース
- 7 [日] 東三河ふれあい看護フォーラム2017◎PLAT 主ホール
- 7 [日] コンサート 春の重奏◎PLAT アートスペース
- 9 [火]—11 [木] 豊橋演劇鑑賞会 第260回例会
劇団俳優座『フル・サークル〜ベルリン1945』◎PLAT 主ホール
- 10 [水] 綾田・ベンガル芝居『やんどとなき二人』◎PLAT アートスペース
- 11 [木] 第39回 桂文我独演会◎PLAT アートスペース
- 12 [金] プラットワンコインコンサート 新津くらは『心ときめくヴァイオリンとピアノの調べ』
◎PLAT アートスペース
- 13 [土] 梅原司平コンサート2017 森羅万象◎PLAT アートスペース
- 13 [土]—14 [日] htm presents This Is Entertainment『MASTERMIND』◎PLAT 主ホール
- 14 [日] 熊倉功夫講演会 宗徧とその時代◎PLAT アートスペース
- 17 [水] 豊橋歌謡祭スペシャルコンサート 市川由紀乃 松原健之◎PLAT 主ホール
- 19 [金] PARCO PRODUCE『サクラババオー』◎PLAT 主ホール
- 20 [土] WHY jazz 楽団 Live@豊橋 PLAT vol.4◎PLAT アートスペース
- 21 [日] 豊橋ゆかりの日本舞踊家の競演 第二十九回吉田をどり◎PLAT 主ホール
- 24 [水]—26 [金] 『ハムレット』◎PLAT 主ホール
- 28 [日] 第35回アコーディオンコンサート◎PLAT アートスペース

6

JUNE

- 2 [金]—3 [土] アマヤドリ『非常の階段』◎PLAT アートスペース
- 4 [日] 斎竹恭子バレエスタジオ 第26回発表会◎PLAT 主ホール
- 4 [日] 三遊亭王楽 独演会◎PLAT アートスペース
- 9 [金] 日本ソル・ゲル学会 第14回セミナー◎PLAT アートスペース
- 10 [土] 『マリアの首 一幻に長崎を想う曲一』◎PLAT 主ホール
- 17 [土] かとうえい子シャンソン教室 第18回発表会◎PLAT アートスペース
- 18 [日] 輪の会 第四回民謡のつどい◎PLAT 主ホール
- 18 [日] 山崎ハコ with 安田裕美『縁』で結ぶ ええじゃないか豊橋ライブ◎PLAT アートスペース
- 24 [土]—25 [日] 『ひとすじの糸』第2回公演 ～玉糸の祖・小淵しちの生涯～ ◎PLAT 主ホール
- 25 [日] 鈴木ユキオ『春の祭典』『Yōyēs に捧ぐ』◎PLAT アートスペース

表紙/「ハムレット」
企画・発行/公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン/味岡伸太郎+ 有限会社STAFF
平成29年4月発行 25号(隔月発行)



PLAT NEWS

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2017年5月—6月
vol. 25



TOYOHASHI
ARTS
THEATRE
PLAT

CONTENTS

- 表紙「ハムレット」 2
- INTERVIEW:1
「ハムレット」
「聴いて、学んで、劇場の客席で」
ジョン・ケアード 4
- INTERVIEW:2
「大道芸 in とよはし」
大道芸が街を元気にする。 6
- INTERVIEW:3
「マリアの首 一幻に長崎を想う曲一」
小川絵梨子・鈴木 杏に聞く。 8
- INTERVIEW:4
アマヤドリ「非常の階段」
広田淳一の「言葉へのこだわり」とは。 10
- INTERVIEW:5
鈴木ユキオ「春の祭典」「Yōyēs に捧ぐ」
熱くダンスを語る、鈴木ユキオ 12
- INFORMATION
PLAT主催公演情報 14
- INTERVIEW:2
「大道芸 in とよはし」
ESSAY
平田 満のちよこつと エッセイ
「この世は舞台」 15
- SUPPORT
TICKET CENTER 16
- PLAT CALENDAR

INTERVIEW:1

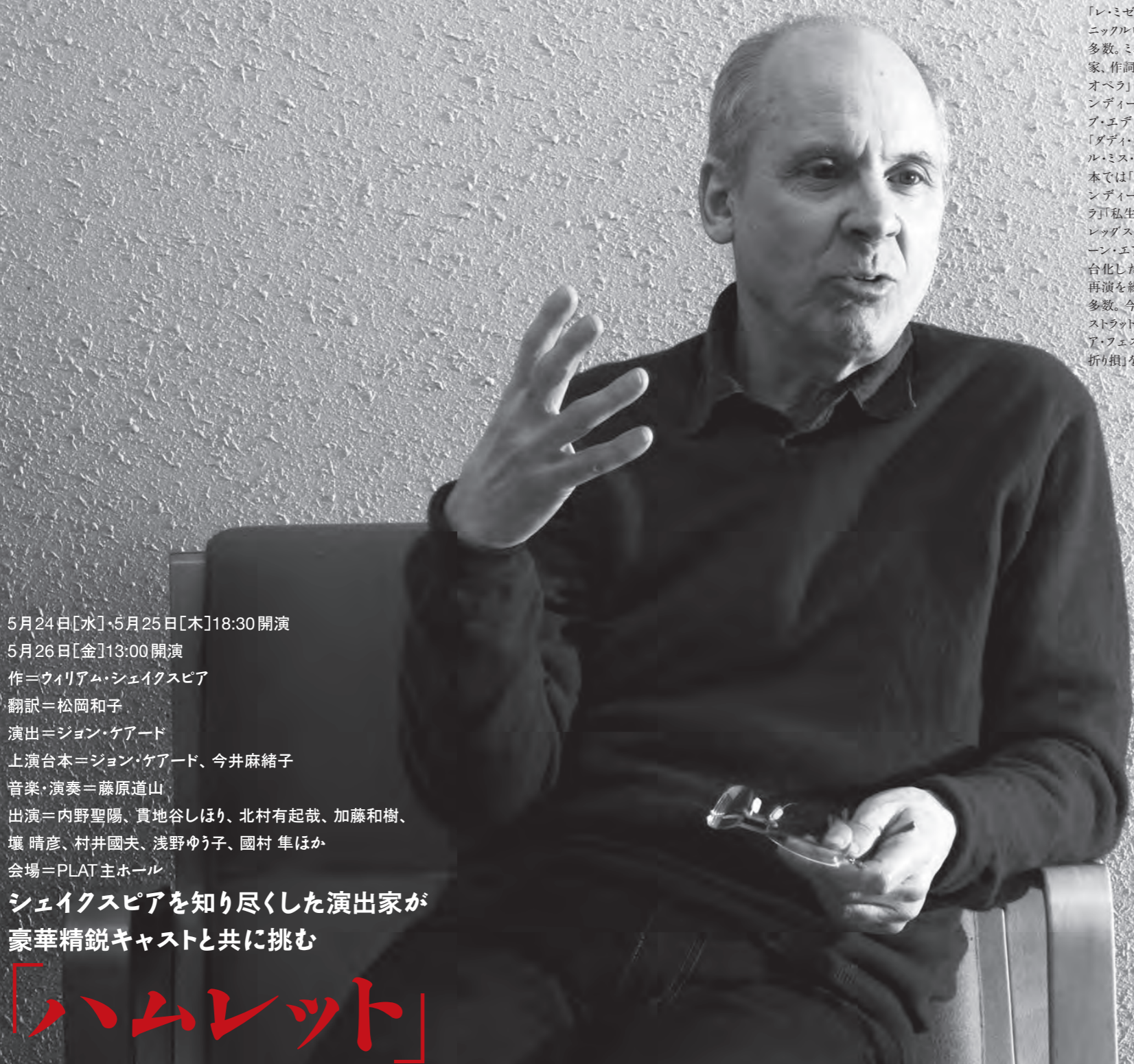
ハムレットは考える人、哲学者であること
それが一番大事だと考えます。

演出

ジョン・ケアード

「聴いて、学んで、劇場の客席で」

聞き手 中島晴美 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT シニアプロデューサー



5月24日[水]・5月25日[木]18:30開演

5月26日[金]13:00開演

作＝ウィリアム・シェイクスピア

翻訳＝松岡和子

演出＝ジョン・ケアード

上演台本＝ジョン・ケアード、今井麻緒子

音楽・演奏＝藤原道山

出演＝内野聖陽、貴地谷しほり、北村有起哉、加藤和樹、

壤 晴彦、村井國夫、浅野ゆう子、國村隼ほか

会場＝PLAT 主ホール

シェイクスピアを知り尽くした演出家が
豪華精鋭キャストと共に挑む

「ハムレット」

ジョン・ケアード／フリーランスの演出家・作家として、演劇、オペラ、ミュージカルの分野で活躍。ヨーロッパでの最近の作品に「マクベス」(アルメイダ劇場)、「ハムレット」(ナショナル・シアター)の他、自身がプリンシパル・ゲスト・ディレクターを務めるストックホルムのロイヤル・ドラマチックシアターで上演された「死の舞踏」「ウィンザーの陽気な女房たち」「テンペスト」「ロミオとジュリエット」「ガートルード」がある。また米英などでオペラ演出なども多数。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー(RSC)では名誉アソシエイトディレクターを務め、これまでに30以上もの古典や新作の演出を手がけてきた。「レ・ミゼラブル」と「ニコラス・ニッケルビー」は世界中で受賞多数。ミュージカルの台本作家、作詞家として、「ベガーズ・オペラ」「ピーターパン」「キャンディード」「チルドレン・オブ・エデン」「ジェーン・エア」「ダディー・ロング・レッグス」「リトル・ミス・スクルージ」など。日本では「レ・ミゼラブル」「キャンディード」「ベガーズ・オペラ」「私生活」「ダディー・ロング・レッグス」「夏の夜の夢」「ジェーン・エア」宮本輝の小説を舞台化した「錦織」が上演され、再演を繰り返している作品も多数。今年夏には、カナダのストラットフォード・シェイクスピア・フェスティバルで「恋の骨折り鍋」を演出。

中島——シェイクスピア作品を何作も演出してこれましたが、日本では何作目でしょうか。

ケアード——『夏の夜の夢』と『十二夜』と、3作目です。

中島——シェイクスピア作品の演出を、ということで『ハムレット』を選ばれたのですか？

それとも、『ハムレット』をということから始まったのでしょうか。

ケアード——2つの違う方向から始まりました。一つは東京芸術劇場芸術監督の野田秀樹さんと友人だという関係があり、野田さんが「何かやらないか」と言ってくださった。もう一つは内野聖陽さんとのつながりで、2人でシェイクスピアをやろうという話があり、その2つがつながって、内野さんが『ハムレット』をやるのですが東京芸術劇場はどうですかということが始まりました。

中島——一人が何役も兼ねています。そのなかで、ホレイシヨは他の役を演じないのですか。

ケアード——最後まで生き残る重要な人物はホレイシヨーしかいない。全てを知っている彼に、ハムレットは「僕のこの物語を伝えるために君は生き残らなきゃいけないんだ」と言います。それをアイディアにしてこの芝居を始めようと考えました。何年も経ってからホレイシヨーがエルシノアに帰り、「ここでハムレットが死んだんだ」と思い出す。すると自分が見てきたイメージが甦り、登場人物が浮かび上がってくる。だから芝居の終わりも登場人物が消えていって終わるというふうになっています。

中島——今回はステージの上にも客席を置きます。何か意図がありそうですが。

ケアード——シェイクスピアは観客になるべく近くで感じてほしいと考えていました。多くの独白がありますが、独白は自分自身に向かって言うのではなく、観客に直接語りかけるものなので、観客が近く、周りを囲われているとすごく助けになると思うのです。それと同時に、今回の場合は14人の役者が演じる『ハムレット』を観客が観ているわけです。芝居の中にさらにもう一つ芝居があり、その中にまた役者たちが出てきて劇中劇をやるという仕組みになっています。ハムレットはその役者たちに向かい「自然にやってくれよ」と言います。「観客に向かって鏡をかかげることなんだ」と言い、「自然に向かって鏡をかかげることは観客に向かって鏡をかかげ、彼らにその姿を見せることなんだ」と言う。すると観客は「あ、自分たちを見ているのだな」と感じる事ができる。皆が共感できる共通の経験が『ハムレット』の芝居の中には必ず入っているのです。愛の難しさとか家族を失うということは観客の一人一人がどこかで経験したことです。つまり観客はそのセリフを聞くことで自分の経験したことに関わりがあると思えるのです。

中島——翻訳にも関わっておられますが、日本の言葉にとっても敏感になられてると感じます。

ケアード——翻訳というのはその都度、言葉を調整しなければなりません。言葉は変わりやすいのですし。しかし翻訳家が言葉の選択をするときはやはり一人一

人によって違うやり方をすると思うのです。シェイクスピアは英語でやるときでもほんとうに分かりづらいところがいっぱいあります。そのミステリアスな言葉が翻訳家の解釈で変わってしまう。そこに新しい演出がくると「あれ、僕は違うふうにこの言葉を取るのだけだ」となっていく。さらに日本人の役者が加わると僕はこう思うというまた別の意見が入って、どうしても変わってしまう。でもそうすることで、いいクリエイティブの過程になり、翻訳というのは、生きているからどんどん変えられるということになるのです。

中島——台本の中で、特に休憩に入る一幕と二幕の切れ目が印象的でした。

ケアード——『ハムレット』でどこに休憩を入れるかは難しく、明白にここという場所がないのですが、あそこはすごくいいところですよ。全てのお膳立てが整ったところで幕切れにする。それよりも前に持ってくることでそこに向かっているのに途中で切ることになるからそこでは切りたくない。でもそれより後になるとお母さんの部屋に行く途中で終わるみたいなことになるからそれもそれでおかしい。だからあそこにするのが一番だなと思います。

中島——今回のもう一つの特徴は音楽ですね、尺八の藤原道山さんはすごいですね。

ケアード——そうですね。全部オリジナルでやっていただきます。尺八がメインで、全てライブでそれに効果音が入る感じになります。

中島——以前ロンドンで演出された時のハムレット役を演じた俳優も素敵でしたが、少しふよかな方でしたね・・・。

ケアード——それは脚本に書いてあるのです。ハムレットがどういう人間かは2つだけ戯曲に書いてあります。1つ目が30歳。2つ目が太っていること、それしか書いてないのです。ハムレットは考える人、哲学者であることが大事で、若くて美しくある必要はないのです。シェイクスピアの時代にハムレットを演じたリチャード・ガーベッジはものすごく太っていた人です。体を超えたものをハムレットに求めなくてはいけません。

中島——最後に今回の『ハムレット』にキャッチコピーをつけるとすれば。

ケアード——「ただ見て、見に来て」。ではこう言います。「ただ見て、聴いて、知って、そこで考えて」。何が『ハムレット』かを知りたかったらよく聴いてということです。でもなければ「聴いて理解して」と言いますか。

僕が一番大事だと考えるのは「いつも考える」。その登場人物が何を考えているかだという気がしています。

14人の役者たちは皆素晴らしい「考える人たち」です。それが、僕が選んだ理由なのです。もちろん言わなければいけない言葉があるし、動かなければいけないこともあるけれど、正しい考えで役者が舞台に立てば、他のことはもう些細なことになります。

中島——考える人『ハムレット』を楽しみにしております。ありがとうございました。

—大道芸フェスティバルも6回目となりますが、街なかで観ることと劇場との違いは。

橋本—大道芸というのは屋外でパフォーマンス、つまり自分の表現を観せること。コミュニケーションのあり方が激変し、劇場やライブハウスに行くことが選択肢の中に入っていない子ども達や、見ることなく大人になった世代が増えてきている時に、いきなり劇場にと言われてもなかなかハードルが高い。映画に例えれば、僕は、監督は誰か、好きな俳優は出ているか、評判はどうかと、さまざまな情報を入れ、映画館に行くか、レンタルビデオまで待つかを選択する。生の舞台となると、選択肢としての素材が少ないというリスクをまず感じてしまう。入場料もなく、投げ銭で、嫌いなら帰っても大丈夫とハードルを下げ、生で観る面白さを感じてもらい、それから、もう少ししつらえの利いた舞台や、より音響がよいライブハウスで聴いたらどうなのだろうとなればいいのです。

ジャズフェスティバルならば、ジャズに興味がない人は行こうとは思わない。クラシックでも演劇祭でも、それが好きな人だけ。だけど、大道芸フェスティバルならば、アートにも会うし、音楽にも会う。その中で好きなものに出会えたらラッキーではないですか。翌日以降の日常の中でちょっとだけ心が華やかになるための、一つのツールを見つけてください。その結果ジャズが好きだと思ったらジャズフェスに行ってください、CDを買ってください、そして劇場にも来てください。門戸を限りなく開いて限定をせず、高尚にならず。だまされたとって1回出て来てください。

—伊藤さんのお立場として、大道芸に期待されることは。

伊藤—元々、この駅周辺の中心市街地にはものや情報があふれ、いろいろなものが交錯して豊橋の文化が根付いたのです。それが、人が集まらなくなり、商業主も高齢化で後継者がいない。そんな中で、駅前にPLATがあり、これが劇場の中だけで完結するのではなく、街のいたるところに大道芸が飛び出し、それによって若い人や子ども達、家族連れ、遊園地やアウトレットモールに出かけていた人達が帰ってきて、文化に触れ、インスピレーションを受け、豊橋の素敵ところを発見できる、素晴らしい出来事だと思っています。

—大道芸の可能性、あるいは大道芸の醍醐味を聞かせてください。

橋本—いわゆる資本主義の社会の、お金の流れとは全く違う方程式で存在するのが文化・表現・アートです。そこをパフォーマーも理解した上で、大道芸をやる。お客さんに、見たものが好きか嫌い。観る観ない、最後まで残る残らない、試行錯誤や葛藤の中で最終的に自分で価値を見出し、いくら入れるか決めて投げ銭で支払うというスタイルは、大道芸においても非常に面白いポイントだと思います。商業施設や管理が厳しいところでは、投げ銭は止められることがあるのですが、ここでは、大道芸のメッセージなりテーマが大きく欠けると

世界で活躍する大道芸人たちが市内各所が劇場に大変身。

「大道芸が街を元気にする。」
橋本隆平、伊藤紀治

サブプロデューサー

豊橋市まちなか活性課長

加納真実



INTERVIEW:2

思います。

—大道芸に投げ銭をする行為は、日本人が意思表示する文化も醸成する。

橋本—投げ銭について、例えば豊橋のフェスティバルに関わっている方々の声として、「最初は投げ銭の文化が伝わらなかったね」「だから、なかなか入らなかったよね」「ただ、最近少しそれが変わってきてるように見えるよね」と。それは豊橋だけではなく全国でも同じです。フェスティバルが続くと、お客さんが出演者とのコミュニケーションのスタイルや、自分の気持ちをどう表現すればいいのかわからない、お教えすることもなく、導くこともなく、育まれていきます。アートも文化も方程式が成り立っていない以上、それに対峙する自分が必要になるのです。それが空洞だと、どう評価をしていいのかわからなくなってしまいます。そこに、例えば評論家や批評家がいる、世間一般の感想に乗り、大勢と似ていることを言えば安心ですが、そうになったら文化・芸能・表現・アートはとれて

を衰退していく。

伊藤—自分も、投げ銭を知らなかった。2年目3年目となった時、自分が行かなければ誰も行かないなと思い始め、いいパフォーマンスを見せていただいたら、上限千円と決めてですが、まずは一番最初に行くようにしました。橋本—大きな金額を入れるのは難しいですが、池袋の「東京芸術劇場」は、池袋西口公園にあるのですが、住み着いている路上生活者もあり、その空気感が非常に難しく、パフォーマンスの力で変えようとしているのですが、路上生活者の一人が一日中見て、最後に一万円札を入れたのです。そこには有名無名とか、何かの評価や後ろ盾など一切関係なく、心が動いた。それを百円でも千円でもない。一万円という大きな決意の下に出す、払うお金には喜びを伴い、大きなプライドというか、記憶としても残るし。あっぱれな気持ちでしかないだろうと思うと、そのお金のやり取りはなかなかないと思います。

14頁に続く

橋本隆平

伊藤紀治

5月4日[木・祝]11:00~19:00・5日[金・祝]11:00~17:30

会場=PLAT、豊橋駅南口駅前広場、広小路通りほか

料金=無料

とよはしアートフェスティバル 2017

「大道芸 in とよはし」

中島——最初でのお話をいただいたとき

小川さんはどう思われましたか。

小川——「難しい!」というのが最初の感想でした。原爆のことは軽はずみに触れてはいけないし、台詞も長崎弁で、なかなか読み解けない。反面、私自身はカトリックの学校で育っていますので、根底に流れている感覚は分かる。けれど、演出する際にそこを主にするとだめだなとは思いました。

史実や歴史やその背景を伝える、いわゆる啓蒙の要素が強い作品は100%私にはできない。では演出者としてどのラインを辿ればいいのか難しく、もちろん当時の人々を描くという感覚は必要ですが、演出として

の見せ方をどうしようか、自問自答しましたし、今もしています。答えが見つかるかもしれないと長崎にも行きましたが、向き合えば向き合うほど迷ってしまいました。

中島——鈴木杏さんはどうでしたか

この役をいただいたとき。

鈴木——まず、小川さんとまた一緒にできることが嬉しかったです。読み解くにはハードルが高い戯曲ですが、とても美しいものを感じました。その第一印象は最後まで持っていていいのかなと思っています。原爆を中心に様々な考えがあり、政治の視点から考えることと、ただひたすら理屈抜きで生き延びていこうとしている人たちとのズレ。各々に持つ正義や考えがあることは遠く

田中千禾夫戯曲の頂点。

「魂の叫び」が心に突き刺さる。

「マリアの首」

—幻に長崎を想う曲—

6月10日[土]13:00 開演

作=田中千禾夫

演出=小川絵梨子

出演=鈴木 杏、伊勢佳世、峯村リエほか

会場=PLAT 主ホール

い話ではないと思っています。

戦争や原爆の渦中を生き抜けたことは想像してもしきれないですし、例えばシェイクスピアにも辿り着けないものがありますが、その時代にタイムスリップはできない。ただ戦争や原爆は、リアルなものとして語り継がれているので、責任みたいなものを感じてしまうところがあります。けれど、それを演じるからといって、同じように生活することは現代では難しい。では辿り着けないところはどうしたら近づけるのだろうというのが大きな課題です。ただそこに捉われていると、それはそれで自分で縛ってしまい、演劇的可能性を狭めてしまおうで……。

この『マリアの首』は、生々しい存在感や風景が描かれているかと思うと、詩的に飛び越えなければいけないものも書かれていますし、バランスやリアリティを模索し

ながら、縛られずに、けれど限られた時間の中で仕上げなければいけない。いろんなものが求められている戯曲で。だから、もがく半面あまり考えすぎて堅くなってもだめと思っています。

中島——杏さんは鹿という面白い名前の役ですね。

キャスティングは何を基準に。

小川——最初から、杏さんでいきたいと考えていました。杏さん以外の皆さんにも言えることですが、私がこの作品に向き合うにあたり、俳優として地に足がついている方々でない絶対無理だと思ったので。

杏さんが鹿で、伊勢佳世さんは忍。それで峯村リエさんの静、この三人の女性が中心となります。田中千禾夫さんはキリスト教徒なので、女性観はどうしてもそれによっているのかなと思います。

中島——ギターが鳴り響いていたり、

鈴木 杏[すずき あん] / 1995年デビュー。2003年、映画『Returner』で第26回日本アカデミー賞新人俳優賞と話題賞をW受賞。同年、『奇跡の人』のヘレン・ケラー役で初舞台。その後、蛭川幸雄、いのうひでのり、鈴木裕美、松尾スズキ、長塚圭史ら実力派の演出家と組み、話題の舞台に出演し続けている。2016年『イニシュマン島のピロー』『母と惑星について、および自転する女たちの記録』で第24回読売演劇大賞 最優秀女優賞を受賞。最近の主な舞台に『イニシュマン島のピロー』『母と惑星について、および自転する女たちの記録』『足跡姫～時代錯誤冬幽霊』(2017年1-3月)など。新国立劇場では「つばし」『星ノ数ホド』に出演。

小川絵梨子[おがわ えりこ] / 1978年生まれ。2004年、ニューヨークのアクターズスタジオ大学院演出部卒業。06～07年、平成17年度文化庁新進芸術家海外派遣制度研修生。10年『今は亡きヘンリー・モス』(翻訳・演出)で第3回小田島雄志・翻訳戯曲賞受賞。12年『12人～奇跡の物語～』『夜の来訪者』『ブライド』の演出で第19回読売演劇大賞優秀演出家賞、杉村春子賞受賞。14年『ピロマン』『帰郷-The Homecoming-』、新国立劇場『OPUS / 作品』の演出で第48回伊国屋演劇賞個人賞、第16回千田是也賞、第21回読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞。16年9月より新国立劇場演劇芸術参

音についてのことも多いですね。

小川——曲が大事かなと、それはすごく思っています。鈴木——鹿の人物描写のト書きに「低いしわがれ声で」と書いてあって、どういう声なのだろうと、そこで必ず止まります。声を指定されることはあまりないので、最後までしわがれ声なのかなとか、それによってまた雰囲気が変わるので……。

中島——小川さんは大胆にいきなり大学を出られてニューヨークのアクターズスタジオに行かれましたね。

小川——そんな大したこともないんです。ただ、ニューヨークから日本にもどって来て、作品作りをさせていただ

いた時には、怖い人たちばかりなんじゃないかと勝手に思っています。でも、すごく優しい方ばかりで、日本でやってもいいんだよ、と許可を頂いた気がしました。ここに至るまでずっと、本当にいい方たちばかりに出会えたのは、ありがたい流れだったなと思います。あとは自分がどう覚悟を持ってやっていくのかだなと毎回悩みます。稽古のときはあまり思わないのですが、客席から本番を見た瞬間に、なぜ私が学生時代にお芝居を見ていた人と仕事しているのか、これは本当に現実なのか。この状況はおかしいんじゃないか、という感覚がずっとあります。いい加減これは言い訳には使えないよなと思いつつ、舞台や劇場にいる人たちは私がずっと憧

終戦後の長崎に生きる三人の女たちの
神との対話、平和への祈り
演出
小川絵梨子・鈴木杏に聞く。
出演
聞き手 中島晴美 穂の国とよはし芸術劇場PLAT シニアプロデューサー

れている人たちばかりだったので、やはり何か不思議な感じで、まだ違和感があります。

中島——では初めての人と組んだときはどうなのですか。

小川——それは正直、不安もありますし、分からないことも多いです。ずっと手探りで、何が常識で何が常識ではないのか。私はプロデュース公演という形態で呼んでいただくことがほとんどですので、当たり前と言えば当たり前なんです。現場現場によって全然違う。そんなの気にしないで自分でやればいいのかというも確かにそうですが、やはり1カ月で作品を作らなければいけないときに、何を選択し、何の我を通し、どこを探り、空気はどこが中心として動き、何を守ってあげればいいのか。気にしがちな性格なので、色々なことが見えてくると分からなくなったりもします。逆に、まったく気にしないで、いわゆる「私は私だからいいよ」という感じにもな

れませんし、それでは成長もしなくなると思うんです。うまくバランスを取るののも難しいですね。ホントに向いてないなあ毎回思います。

中島——私から見ると小川さんはすごく深く見えますよ。

小川——全然潔くないです!けれど、この戯曲をやると思った時には、何かジャッジする本ではない、きちんと入り込まなくてはいけないと思いました。思い描いている終着点もなんとなく頭の中にはあるのですが、それが果たしているのかも思っています。それはもちろん稽古を重ねながら、肉体を持った俳優さんに教えてもらえることがあるので、「あー甘かった」とか、「そっちの意味だったのか!」ということは日々、見えてくると思いますし、稽古場で起きることを想像すると、とても楽しみです。

中島——ほんとに初日がとても楽しみになりました。ありがとうございます。

高校生と創る演劇第一弾として上演した「穂の国の『転校生』」で演出を務めた広田淳一が主宰する「アマヤドリ」が、プラットに初登場。

— 最初の劇団名「ひょっとこ乱舞」から「アマヤドリ」に変わった理由は。

広田— 僕らの劇団は元々大学のサークルからスタートしたのですが、旗揚げのメンバー達が2009年ごろを境に入れ替わりまして、それで名前を変えたいと思ったんです。「アマヤドリ」という名前は、お客様一人ひとりにとって演劇が直接の目的にはならないまでも、人生における少しの寄り道や雨宿りみたいなものになれたらなあ、とそんな思いでつけました。

— 太宰治の『斜陽』がモチーフとありますが、太宰への特別な共感がありますか。

広田— そうですね。太宰は同じ作品を何度も読み返した数少ない小説家の一人です。中学の頃、初めて太宰を読んだ時には酒ばかり呑んで遊んでいるイメージだったんですが、ちょうど彼の人生になぞらえれば今の僕は最晩年の時期に重なりますから、彼の残した原稿の量を考えてと勤勉な人だったんだな、と思います。『斜陽』は特に好きな作品のひとつなんですが、元々太宰はあの作品をチェーホフの戯曲『桜の園』を参照しつつ書いている。『非常の階段』は、それをもう一度、演劇作品としてリライトしてみようという試みです。彼のモチーフを追いつつ現代日本の「家庭」を書いてみたいと思っています。

『斜陽』は、滅びの四重奏で四人の登場人達を中心にしつつ、戦後の世相の中で旧華族、あるいは古き良き日本の気高いものや洗練されたものが損なわれ、失われていく姿を明るく描いている。彼の言葉に、「明るさは滅びの姿であろうか、人も家も、暗いうちはまだ滅亡せぬ」というのがあるんですが、そういった視点もヒントにして創作していこうと思います。

『非常の階段』は家族の話です。総中流社会なんて言われて明日のご飯を心配しないで、いわゆるマイホームとしての楽しさや豊かさを獲得していった僕の親の世代から、ここ数十年かけて、サザエさんの日常が失われてしまっているのにそれに替わる家族のイメージを作れないでいる日本人の姿を、この劇を通じて追ってみたいんです。以前、うまく子どもを育てられない母親の問題を戯曲にしたことがありました。今、親がダメだとモロにその破綻を子ども達が引き受けることになる。家族を構成する別のメンバーが一人の出来損ないをフォローする厚みが失われていると思うんです。『非常の階段』はそういう家族のシステム、形が失われていく物語です。と同時に、いわゆるオレオレ詐欺の犯罪組織を追いかけた話でもあります。成長する過程でつまずき、それを取り返せないまま詐欺のグループに巻き込まれていかざるを得なかった未熟な人達、親も頼れず、社会に参入していく資格を獲得できなかった若者たちが、擬似的なファミリーを作り出し、そして滅んでいく過程を描いていきたいと思っています。その中で擬似的な家族の姿

を描ければいいなと思っています。

— 広田さんの戯曲には言葉へのこだわりを強く感じるのですが。

広田— 観客として演劇を観る体験より、小説の読者からスタートしているという意味では言葉へのこだわりが強いかもしれませんが。ある時、他の方の作品を観て自分が何にこだわっているのか、自分が当たり前としているものはなんなのかが見えてきたことがあります。それは、まさに言葉の問題です。僕の芝居は、すごくしゃべる。太宰の言葉に「愛は言葉だ」なんてものもありますが、心中はさておき「愛している」と表現しなければ愛していることにならない。若い頃に確かにそうだな、と思いました。伝達の中にだけ表現は存在する。演劇はたったの2時間、長くても大体3時間ぐらいにまとめるわけですから、多くの省略があります。だから戯曲の言葉は、結晶のようなものでなければいけないと思っています。いったん発せられた言葉は、終演するまでずっと響いている。一幕で出てきた台詞が二幕でも1回出て

「言葉へのこだわり」とは。広田淳一の

太宰治の「斜陽」をモチーフに現代日本が抱える様々な事象を描く。



広田淳一[ひろた・じゅんいち] / 1978年生まれ。東京都出身。2001年、東京大学在学中に「ひょっとこ乱舞」を旗揚げ、主宰する。以降、全作品で脚本・演出を担当し、しばしば出演。さりげない日常会話ときらびやかな詩的言語を縦横に駆使し、身体性を絡めた表現を展開。随所にクラッピングや群舞など音楽・ダンス的な要素も節操なく取り入れ、リズムとスピード、熱量と脱力が交錯する「喋りの芸」としての舞台を志向している。主な受賞歴 / 2004年日本演出者協会主催 若手演出家コンクール 2004 最優秀演出家賞受賞(『無題のム』にて) 2011年『ロクな死にかた』にて劇作家協会新人戯曲賞 優秀賞 2012年『うれしい悲鳴』にて劇作家協会新人戯曲賞 優秀賞

きたら、共鳴しあうことが必ず起きる。それがどんなハーモニーになるのかを、常に考えています。

— 配役の名前のナイトは騎士や貴族、甘粕には憲兵の名を連想させます。

広田— いつも名前は結構苦戦するところですね。例えば甘粕という名前は、大杉栄を捕まえた人として有名ですから、自由を締め付ける側のイメージとして出しています。すべての観客がそういった「遊び」に気づくわけじゃないと思うんですが、ただ無意識の中で伝わっていくものがあると思うんです。名前であんまり悩んじゃうと書き始められないので、えいっと言って決めてしまうことも多いんですが、その辺りはちょっと意識しながら書いていますね。

— 足場の組まれた簡素な舞台のイメージですが、まさに「透明の家の物語」のイメージです。

広田— 初演の際、美術家さんと話していてほんと出てきたキーワードが「透明の家」でした。その後は戯曲を完成させていく上でも重要になった言葉ですね。家というものの不確かさ、不安定さを考えた時に、透明になっているという感覚がしっくりきたんです。それは一つには僕自身、親の仕事の関係でしょっちゅう引っ越しをしていたので家のイメージが定まらず、この家こそ我が家と思っただけで、それは僕自身の抱えているある種の喪失感でもあり、都市に住んでいる人が共有できるモチーフだろうと思ったんです。『非常の階段』は、そういった失われた家、透明になった家に執着したり、憧れたりする人達を描いているのだと思います。

— 東京へのこだわり、あるいは地域と中央の関係などをお聞かせください。

広田— 昨年、あちこちの土地で再演した『ロクな死に方』という作品では、池袋や下北沢という地名にこだわりました。ここ何年か福岡、あるいは仙台・北海道・大阪と、地域の方々と接するにつけ、やはり僕は東京という

地域にいるんだなと思った。劇作家は、何を書いてもいいからこそ、これぞと、思い込めるモチーフに出会った時に力を発揮すると思う。自分は東京という地域にこだわらないと自分ならではの強みを生かした創作にはならないと思っているんです。

— 豊橋という地域をどう感じていますか。

広田— 以前、豊橋に少し長めに滞在して地元の高校生たちと『転校生』という劇を作ったんです。みんな名古屋と一緒にたにされることをすごく嫌がって、それにはびっくりしましたね(笑) 関東と関西、どちらにも近い位置にあつて、ちょうど間ぐらい。でも、名古屋の一部なのだと絶対言いたくない。自信やこだわりを強く持っている一方で、「自分達の地元最高!」と言いつつ、ちよつと宙ぶらりんになったような地元愛を感じました。

『転校生』は僕にとってもすごく大きな体験だったので、豊橋は今でも非常に大きな思い出の地になっていますね。住んでいる人の顔が見えるというか、そういう感覚が持てる数少ない場所なので、「いつか豊橋で絶対やらなくちゃ」と思っていました。なのでまあ、今回が最初で最後にならないようがんばります(笑)



6月2日[金]19:00開演

6月3日[土]14:30開演

作・演出=広田淳一

出演=笠井里美、渡邊圭介、倉田大輔ほか

会場=PLATアートスペース

PLAT 小劇場シリーズ

アマヤドリ「非常の階段」

鈴木ユキオ [すずき ゆきお] / '97年アスベスト館にて舞踏を始め、2000年より自身の創作活動を開始。しなやかで繊細に、且つ空間からはみだすような強靱な身体・ダンスで、多くの観客を魅了する。現在は、「YUKIO SUZUKI projects」として幅広く活動展開し、「ダンストリエンナーレ トーキョー」「シビウ国際演劇フェスティバル」等に参加。バレエダンサーや小学生、身体に障害のあるダンサーへの振付や「スピッツ」や「エゴラッピン」「plenty」等のMV・「ミナベルホネン」のカタログモデル出演、ダンサーとして、室伏鴻・中村恩恵・小野寺修二・白井剛などの作品に出演。また、舞踏のメソッドを基礎に身体を丁寧に意識するワークショップを各地で開催している。トヨタコレオグラフィアワードでは、'05年にオーディエンス賞、'08年に次代を担う振付家賞(グランプリ)を受賞。'12年フランス・パリ市立劇場「Danse Elargie」では10組のファイナリストに選ばれた。

人からはじめて舞踏を経た僕と、彼女のダンス言語は全く違う。そのすり合わせにもすごく時間がかかりました。一生懸命説明しても彼女はチンブンカンブンで(笑)イライラすることもありましたね。本番まで「違う」と言い続けるんです。でも振りりは決まっているから「違う、違う」と言われてもわからなくなる。ダンサーは言われたことをちゃんとやりたがる。でもそれではつまらなくなるという追いかけっこ。だから揺らし続けたのですが、今は「どうやれば揺れるか」まで含めて振り付ける方法もできました。彼女たちもそれを求めているとわかり、今は創作も随分スムーズになりましたね。

—最後に豊橋のお客さんに対してメッセージがありましたら

鈴木—実際に劇場に足を運んで体験していただくと、単純に「ダンスって面白い」とか「なんかわからないけど身体すごかった」「美しかった」とか「きれいだった」、あるいは「醜かった」でもいいですから、是非どんなものかなと観に来ていただきたいですね。
安次嶺—ダンスを観る方法なんてないので、やはり、観て何かを感じて欲しいですね。そのためにもエネルギーを溜め込んで行こうと思っています。

ることこそが未来に向かうことだと思っています。

—安次嶺さんのダンスは、クラシックバレエから始めたそうですが、鈴木さんとは違う苦しさがあったのでは。

安次嶺—私は3歳からクラシックバレエを始め、ユキオさんを通じて今のダンスを教えてもらったのです。やはり「踊るな」とよく言われます。しかし、3歳から「踊り」が身体に染みついているので、また何もないゼロから正解を探していく大変さとキツさは、常に死に物狂いです。

無意識に足を上げていることにも気づいていないのです。「その足を上げることによってどういう意味があったの?」と言われて、「いや...」。その永遠の繰り返し。でも、本当に足が上がっている時は「すごくいい」と言われるから、上げるからダメではない。「じゃあ何が正解なんだ」と永遠に探し続けるというのは、稽古も本番も苦しい。

鈴木—彼女はホントにダンサーとして素晴らしく、素

静謐に爆発する身体で、迫り来る音楽に対峙する、
研ぎ澄まされたふたつの身体が、空間に投げ出されたとき、
我々は、現代の「春」の行方をしるることとなる。
熱くダンスを語る、鈴木ユキオ

—『春の祭典』と『Yoyesに捧ぐ』

この二つのタイトルの関係は。

鈴木—基本的には一つの作品ですが、『春の祭典』という曲は登録された名で、音楽をかけたら最後までかけきり、編曲もできない。それをどう料理するかが、演出家がトライする面白さでもあるのです。また、世界情勢を絡めようと調べると、スペイン・バスク地方の独立運動指導者Yoyesが出てきた。彼女の映画で使われている曲も是非使いたいとなり、タイトルは二つ並んでいますが、一つの作品を作るルーツとして観ていただけたらと思います。

—映像を拝見して、時間と空間を埋め尽くすとは違う、身体表現と思っただけですが。

鈴木—そこを観てもらえたのは嬉しいです。やはり空間的にも余白を作りたい。踊り・動きも、無意識でありながらも意図的な間を重要視し、動かされるのを待つというか、必然性を引き起こし、何かに反応し、リアクションしていくことで体が動いていく。いわゆる踊りを踊るのではなく、抑制をどう引き起こすかを大切にしています。僕はダンス、いわゆる舞踏を始めたのが23歳だったので、常にダンスとは何なのかを考えざるを得なかった。ダンスに親しんで来なかった分、作品を作ることと同時に自分の身体の探求をし続けなければいけなかったんですね。そして一つの方向を探求すると今度は違う方向の問いが生まれてくるので、今度はそちらを掘り進めていく、それを続けていくことで結果的に常に変化してこれたのだと思います。そんな風に考え方や身体が同時に柔軟に変化していくのが自分のスタイルだと思っています。

—舞踏というスタイルができていり中、鈴木さんには違うスタイルを感じます。

鈴木—舞踏に憧れを持ち、それに満足していた時期もありました。しかしある時期、土方巽さんの映像や写真の強烈な印象をどこかで真似してないか、それが本当に舞踏なのかと考えるようになりました。土方さんや大野一雄さんの第一世代、あるいはそれを生で観た人たちは、皆自分の踊りを探して創り出していた。彼らと同じように僕自身も自分の踊りを作らなければならぬと考えるようになりました。同時に舞踏の大切なものは引き継いでいるつもりです。舞踏から教わったことは沢山ありますが、ダンスとは何かということ考え続けろということが自分にとってとても重要な言葉として今の創作に生きています。ダンスとは何かと考え続けると踊れなくなってしまうのですが、そこから踊りを始めることがとても大切なことだと思っています。

—踊らないとはどういうことなのでしょう。そこからどんなことを得ようとしているのですか。

鈴木—踊りはゼロから自分で作るということです。すでにある踊りを踊るなという意味だと思います。自分自身でゼロから踊りを作りだし自分の方法論を生み出すこと、これはとても大変なことですが、そこに挑戦し続け



6月25[日]14:30開演
演出・振付＝鈴木ユキオ
出演＝鈴木ユキオ、安次嶺菜緒
音楽＝イギーリー・ストラヴィンスキー「春の祭典」
会場＝PLATアールスペース

平成 29 年度公共ホール現代ダンス活性化事業
PLAT ダンスプログラム

鈴木ユキオ
「春の祭典」「Yoyesに捧ぐ」

PLAT主催公演情報

プラット開館5年を祝う
記念トーク&コンサート



風琴工房「Penalty killing remix version」



「ピノキオ 〜または白雪姫の悲劇〜」



宮本亜門

文楽公演「本朝廿四孝」



桐竹勤十郎

マーム&ジプシー
「10th Anniversary Tour」



『^^^ かえりの合図、まっただ食卓、そこ、きつと-----』
撮影：橋本倫夫

こどものためのバレエ劇場
「しらゆき姫」



撮影：鹿座隆司

劇団四季ファミリーミュージカル
「嵐の中の子どもたち」



プラットワンコインコンサート



新津くらら

プラットワンコインコンサート



Trio Katze [トリオ・カツツェ]
中村真帆、関根のぞみ、犬塚沙希

4/30 [日] 14:00開演 整理券予定枚数終了 プラット開館5年を祝う記念トーク&コンサート

プラットは今年で開館5年目となります。これまで支えていただいた皆様に感謝の意を込めて、芸術文化アドバイザーの平田満によるトークや、プラットに縁のある若手演奏家らによる演奏をお届けします。●出演＝平田 満ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝無料(要入場整理券)

5/4 [木・祝] 11:00～19:00・5/5 [金・祝] 11:00～17:30 とよはしアートフェスティバル2017 大道芸inとよはし

●会場＝PLAT、豊橋駅南口駅前広場、広小路通りほか●料金＝無料

5/10 [水] 14:00開演/19:00開演 PLAT小劇場シリーズ 綾田・ベンガル芝居

「やんごとなき二人」
綾田・ベンガル芝居が10年ぶりに復活！NHKドラマ『ごちそうさん』や『真田丸』でおなじみの綾田俊樹と、PLATプロデュース公演『父！』に出演したベンガルが、二人のおかしなホームレスの物語をお贈りします。●作＝安倍照雄●演出＝平山秀幸●出演＝綾田俊樹、ベンガルほか●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席指定]一般4,000円ほか

好評販売中

5/24 [水]・5/25 [木] 18:30開演 5/26 [金] 13:00開演 「ハムレット」

●作＝ウィリアム・シェイクスピア●翻訳＝松岡和子●上演台本＝ジョン・ケアード、今井麻緒子●演出＝ジョン・ケアード●音楽・演奏＝藤原道山●出演＝内野聖陽、貫地谷しほり、北村有起哉、加藤和樹、浅野ゆり子、國村隼ほか●会場＝PLAT主ホール●前売予定枚数終了：当日券の販売に関してはお問い合わせください。

6/2 [金] 19:00開演・6/3 [土] 14:30開演 PLAT小劇場シリーズ アマヤドリ

「非常の階段」
●会員先行・セット券＝4月15日(土)●一般発売＝4月29日(土・祝)●作・演出＝広田淳一●出演＝笠井里美、渡邊圭介、倉田大輔ほか●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・日時指定・整理番号付]一般3,000円ほか●風琴工房『Penalty killing remix version』とのセット券(5,000円・枚数限定)あり

マイセレクト4

6/10 [土] 13:00開演 「マリアの首一幻に長崎を想う曲」好評販売中

●作＝田中千禾夫●演出＝小川絵梨子●出演＝鈴木杏、伊勢佳世、峯村リエほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席6,000円/A席4,500円/B席3,000円ほか

【関連企画】 小川絵梨子 演劇ワークショップ

●日時＝5/27[土]13:00～18:00●講師＝小川絵梨子●会場＝PLAT創造活動室A●対象＝高校生以上。演劇経験不問。●定員＝20名(応募者多数の場合は選考)●参加費＝1,000円●締切＝4月30日(日)17:00必着●申込方法＝①申込書に必要事項を記入の上、窓口に持参かFAX(0532-55-8192)②劇場ホームページの専用申込フォームより

6/25 [日] 14:30開演 平成29年度公共ホール現代ダンス活性化事業 PLATダンスプログラム

鈴木ユキオ「春の祭典」「Yoyesに捧ぐ」
●振付・演出＝鈴木ユキオ●出演＝鈴木ユキオ、安次嶺菜緒●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・整理番号付]一般2,000円/ユース(24歳以下)1,000円

【関連企画】 鈴木ユキオ ダンスワークショップ

「知っているようで知らないカラダの発見」
●日時＝6/24[土]14:00～16:00●講師＝鈴木ユキオ●会場＝PLAT創造活動室A●対象＝小学生以上●定員＝30名(申込順)●参加費＝1,000円(公演チケットをお持ちの方は無料)●申込方法＝①申込書に必要事項を記入の上、窓口に持参かFAX(0532-55-8192)②劇場ホームページの専用申込フォームより

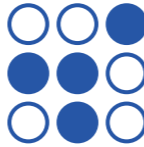
7/29 [土]・30 [日] 14:30開演 PLAT小劇場シリーズ 風琴工房

「Penalty killing remix version」

とある地方都市をホームとするプロアイスホッケーチームをモデルに、マイナースポーツの厳しい現実と人生を彩る喜びを描いた作品。2015年の初演から取材を重ね、チームの現状を加味したリミックスバージョンをお送りします。●会員先行・セット券＝4月15日(土)●一般発売＝4月29日(土・祝)●脚本・演出＝詩森ろば●出演＝栗野史浩、森下亮、筒井俊作ほか●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・日時指定・整理番号付]一般3,000円ほか●アマヤドリ『非常の階段』とのセット券(5,000円・枚数限定)あり

【関連企画】 詩森ろば 演劇ワークショップ

●日時＝①5/11[木]19:00～21:30「言葉をつかわずに対話してみる」②5/12[金]19:00～21:30「言葉を使って対話してみる」●講師＝詩森ろば●会場＝PLAT創造活動室A●対象＝高校生以上。演劇経験不問●定員＝各回20名(応募多数の場合は選考)●参加費＝各回1,000円●申込方法＝①申込書に必要事項を記入の上、4月24日[月]までに窓口に持参かFAX(0532-55-8192)②劇場ホームページの専用申込フォームより



マイセレクト4

4演目10,000円(枚数限定)
販売期間
4月9日(日)～5月31日(水)

右記対象公演の中から
お好きな4公演を選ぶ
自分だけの“マイセレクト”
最大3,000円お得！
詳しくはお問合せ下さい。

6/2 [金]・6/3 [土]
「非常の階段」

6/25 [日]
「春の祭典」「Yoyesに捧ぐ」

7/29 [土]・7/30 [日]
「Penalty killing remix version」

11/30 [木]～12/6 [水]
「荒れ野(仮)」

2018/1/27 [土]・1/28 [日]
「三月の5日間」

～リクリエーション～

2018/3/10 [土]・3/11 [日]
「彼の地[ka no chi]Ⅱ(仮)」



「やんごとなき二人」

8/11 [金・祝] 11:00 / 16:00開演 文楽公演 「本朝廿四孝」

「十種香の段」「奥庭狐火の段」を上演。戦国の武田と上杉(長尾)の争いに絡む八重垣姫の恋心、どんでん返しの続くスリルに満ちた時代物を、人形でしか出来ないダイナミックな表現で魅せます。●会員先行＝5月13日(土)●一般発売＝5月28日(日)●出演＝桐竹勤十郎、吉田勘彌、竹本津駒太夫、豊竹芳穂太夫ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]一般5,000円/ユース(24歳以下)2,500円

【関連企画】 人形遣い体験～文楽学び塾

●日時＝6/27[火]18:00～20:00●講師＝吉田勘彌、吉田勘市、桐竹勤次郎●会場＝PLAT研修室(大)●対象＝小学生以上●定員＝30名(申込順)●参加費＝1,000円●申込方法＝①申込書に必要事項を記入の上、窓口に持参かFAX(0532-55-8192)②劇場ホームページの専用申込フォームより

8/25 [金] 14:00開演 親子のためのファミリー・ミュージカル

「ピノキオ 〜または白雪姫の悲劇〜」

世界中すべての子どもたちへ贈る、楽しさがぎっしりつまったミュージカル。●会員先行＝5月27日(土)●一般発売＝6月10日(土)●原作＝カルロ・コロディ●作曲・音楽監督＝深沢桂子●演出・脚色＝宮本亜門●共同演出・振付＝福島桂子●美術＝下田昌克、大島広子●出演＝小此木まり、池田有希子ほか●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]おとな3,000円/子ども(高校生以下)500円

9/8 [金] 19:00開演[1] 9/9 [土] 13:00開演[2] / 18:00開演[3] 9/10 [日] 13:00開演[4]

PLAT小劇場シリーズ マーム&ジプシー 「10th Anniversary Tour」

[1]『クラゲノココロ』『モモノパノラマ』『ヒダリメノヒダ』
[2]『^^^ かえりの合図、まっただ食卓、そこ、きつと-----』
[3]『あつこのはなし』
[4]『夜、さよなら』夜が明けないうち、朝『Kと真夜中のほとりて』日本の現代演劇をリードする藤田貴大/マーム&ジプシーは、その時々々に過去作品に手を加え、現在進行形の作品として作品を磨き上げてきました。活動10周年を記念して、モチーフごとに過去の10作品を3作品+1作品に作り替え、一挙上演に挑みます。●会員先行・セット券＝6月3日(土)●一般発売＝6月18日(日)●作・演出＝藤田貴大●出演＝石井亮介、尾野島慎太郎、川崎ゆり子、中島広隆、成田亜佑美、吉田聡子、山本達久ほか●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・整理番号付]一般3,000円ほか●そのほか選べる2・3・4公演セット券(枚数限定、プラットチケットセンターのみ取扱い)あり

U24・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
●料金＝U24[24歳以下対象]:公演ごとに指定する席種の半額/高校生以下:一律1,000円
●購入方法＝各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
●その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。席席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。

9/10 [日] 16:30開演 劇団四季ファミリーミュージカル 「嵐の中の子どもたち」

嵐が村を襲った日、子どもたちだけの冒険がはじまる――。大人がいなくても世界の中で、18人の子もたちが繰り広げる。友情と勇気がつまった冒険物語。●会員先行＝6月4日(日)●一般発売＝6月10日(土)●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]S席一般5,400円、小学生以下3,240円/A席一般3,240円、小学生以下2,160円※3歳以上の膝上鑑賞不可。3歳未満の膝上鑑賞無料。

9/16 [土] 14:00開演 新国立劇場 こどものためのバレエ劇場「しらゆき姫」

劇場には魔法がかかっている、女の子はみんなお姫さまになれる！初めてバレエをご覧になるお子様にも楽しんでいただける趣向がいっぱい。家族で楽しめるバレエ公演をお贈りします。●会員先行＝6月17日(土)●一般発売＝7月2日(日)●音楽＝J・シュトラウスⅡ世●振付＝小倉佐知子●監修＝牧阿佐美●出演＝新国立劇場バレエ団●会場＝PLAT主ホール●料金＝[全席指定]おとな4,000円/子ども(中学生以下)1,000円ほか

「翻訳家聞いてみよう！」 ウィリアム・シェイクスピア「ハムレット」編

5/20 [土] 15:00～17:00
●講師＝松岡和子●会場＝PLAT研修室(大)●定員＝50名(先着)
●参加費＝無料●申込方法＝①プラットチケットセンター窓口・電話(電話0532-39-3090)②劇場ホームページの専用申込フォームより

若手音楽家育成事業 プラットワンコインコンサート

「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を」と企画されたPLATオリジナルのワンコインコンサートです。●会場＝PLATアートスペース●料金＝[全席自由・整理番号付]各回500円

5/12 [金] 19:00開演 好評販売中 新津くらら「心ときめくヴァイオリンとピアノの調べ」

7/1 [土] 15:00開演●5/12 [金] 10:00販売開始
Trio Katze [トリオ・カツツェ] 中村真帆(ヴァイオリン)、関根のぞみ(チェロ)、犬塚沙希(ピアノ)

7/17 [月・祝] 15:00開演●5/12 [金] 10:00販売開始
高柳鞠子(フルート)・三浦真理子(ピアノ)

8/31 [木] 11:00開演 / 15:00開演●5/12 [金] 10:00販売開始
Musica Piatto [ムジカピアット] 杉浦孝治(テノール)、兵藤雅晃(チェロ)、天野初菜(ピアノ)、川越未晴(ゲストソプラノ)

INTERVIEW:2

とよはしアートフェスティバル 2017
「大道芸inとよはし」



中国雑伎芸術団

竹内直 & Wagan brothers



ゴールドenz from 大駱駝艦

5頁より続く

——まだ決まっていと思うのですが、
今回の出演者を二、三、教えていただければ。

橋本——今年は3人組の日本人のブチサーカスみたいなものを新しくお観せします。なんかすごい人が来て、面白いものを観て、わーっと叫んで楽しかったという記憶が子ども達に一回でも入れれば、大人になっていく過程できつと芽が出て、少しずつ稲刈りができるようになる。そういうことをちょっと意識したパフォーマンスも入れようと思います。大人だけではなく、子どもも楽しめますよというのが、お勧めしたいところでしょうか。

いわゆる大道芸というイメージをまず取り払って外に出ていただければ、音楽もある。その中にはジャズもあればクラシックもある。アフリカのパーカッションもあれば、パントマイムもある。中国雑伎もあれば、加納真実さんのような言語化できない不思議な世界があって、大駱駝艦があって、地面に絵を描いている人がいて、ジャンルや大道芸という言葉でくれない人達が出るので、どれかは好きになれると思います。

大道芸は、太陽の下で何百人の人達が集まり、その顔がお客様同士にも見える。例えば劇場だと一方向に向いて全員座り、明かりは落ちるので、隣の人の顔は見えない。それが大道芸では皆見える。それが街の空気をふわっと軽くし優しく、それだけで街を元気にすると思います。

伊藤——僕もそう思います。大勢の人が本当にここやかに、親子で来ていたり、おじいちゃんおばあちゃんも連れてきたり。そんなのはなかなか見られない。

橋本——ほぐす力がアートや表現、パフォーマンス、エンターテイメントにはある。体の治療とかデトックスには病院がある。マッサージもある。だけど、体を治しても、心が疲弊してしまったりやはり辛い。心をどうこうできるのは、僕ら側の世界の住人がやれることで、「病は気から」と言うのではないですか。



橋本隆平[はしもと・りゅうへい] / 幼少時より大道芸フェスティバルプロデューサーである父、橋本隆雄と共に、フェスティバル運営に携わり、その経験から現在も、国内の数多くのフェスティバルにおいて、統括ディレクターを務める。また自身も様々な分野において大道芸を中心としたフェス・イベントのプロデュースも手掛けている。その他、海外との交流も持ち、主にヨーロッパを中心に、パフォーマンスの招聘活動も行う。ヘアアーティスト 統括ディレクター、日テレ黄金週間 ART DAIDOGEI プロデュース、Tokyo ミッドタウン Open the Park Performance プロデュース、AP BANK FES 2010 大道芸プロデュース、高松 大道芸フェスタ 総合プロデュース、他多数

ESSAY



芸術文化アドバイザー

平田 満の ちよこつとエッセイ

第22回「この世は舞台」

今年も3月11日がやってきました。6年前の当日は公演初日の6日前で、舞台稽古をしている最中でした。地下の小さな劇場でしたが、すぐにみんなで地上に避難しました。路上でも不安な気持ちで目の前のビルが揺れるのを眺めていました。その後、交通の乱れで道具が届かなかつたり、遠方からのお客様が来られなかつたりしながらも、なんとか全公演を終えました。

あの時、スタッフもキャストもお客様もそれぞれの思いを抱きながら、ひとつ空間で同じ時間、あるフィクションを共有していることに、改めて不思議な感慨を覚えました。永遠と瞬間、幸福と不幸、喜びと悲しみが表裏一体だということを、あの時ほど思い知ったことはなかつたかもしれません。

私はこれまでいろんな劇場、空間でいろんな演劇体験をしました。芝居の神様がいるのではないかと思うような京都南座や新橋演舞場、染め物工場跡を利用した漆黒の空間ベニサンピット、360度から見られる青山円形劇場、線路際の畳敷きの小屋、東芸劇場、入場料99円、客席99人のVAN99ホールなど、さまざまな場所で芝居をしてきました。大学の教室で机を並べて舞台にしたり、由緒ある能舞台で煙草を吸う芝居をして出入り禁止になったり、伝統ある俳優座の建て替え前の最後の公演で、歴史ある黒ずんだむきだしの壁の前に銀粉ショーをやつたりもしました。

としてここではけがをしたり、停電で中断したりのいろんなアクシデントがあり、公演中に子供が生まれたり家族に不幸があつたりの人生を経験しました。

「この世は舞台…」というシェークスピアの台詞がありますが、舞台もまた人生の喜びや悲しみのしみ込んだ空間です。プラット誕生から5年がたちます。幸いにして大きな事故もなく人も集まり、とてもいい環境の劇場になっています。よく生きた老人の皺や年代物の道具、趣のある盆栽が味わい深いように、プラットも喜びや悲しみを呼吸し、何かが生まれる感動を持った、「生きている」劇場として成長していつてほしいと願っています。

SUPPORT



知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

有限会社 魚伊
電話 52-5256

株式会社 竹尾建築設計事務所
代表取締役 竹尾 誠
豊橋事務所/豊橋市平川南町91-2 千440-0035 Tel.0532-62-1331(代) Fax.0532-62-1332
浜松事務所/浜松市東区流通元町13 千435-0007 Tel.053-422-3628(代)

YOSHINO ASSOCIATES architects & engineers
http://www.440a.co.jp

グロトリアンピアノ地域特約店
白羽楽器 株式会社
電話053-464-3015

竹内産婦人科
産婦人科 婦人科(不妊治療)
豊橋市新本町23 (豊橋 竹内産婦人科) 電話053-464-3015

内科・消化器科・循環器科・眼科・整形外科・脳神経外科・リハビリテーション科
医療法人羔羊会 弥生病院
日本医療機能評価機構認定 渡辺のり子(東高2回生)
千441-8106 豊橋市弥生町字東豊和96 電話(大代)48-2211

看板広告 アラキスタヂオ
豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

医療法人慈豊会
大島整形外科クリニック 院長 大島 毅
東田町井原39の7(市電赤岩口終点前) 電話62-5511(代)

ONOCOM 株式会社 オノコム

株式会社 谷山建築設計事務所
豊橋市西羽田町183 http://taniyama-archi.com

外科・内科・胃腸科・麻酔科・消化器科・呼吸器科
伊藤医院 伊藤之一 伊藤文二
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283(代)

創業文政年間 穀飯せく宗
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL.53-2809

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱東京UFJ銀行 みずほ銀行 静岡銀行 名古屋銀行
三井住友銀行 三井住友信託銀行 清水銀行 第三銀行
十六銀行 愛知銀行 中京銀行 大垣共立銀行

御茶屋菓子専門店
若松園
御菓子司 創業江戸

気まぐれコンサート
事務局/0532-62-9259(小川恵司)

安心安全な地下駐車場
パ・カ500 ソウの親子の看板が自印
プラット主ホール・アートスペース公演等へのお客様は30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科・麻酔科
塩之谷整形外科
院長 塩之谷 昌 副院長 塩之谷 香
豊橋市植田町関取54 電話 0532-25-2115(代)

豊橋名産 命あくわ

井上皮フ科クリニック
診療時間 月・火・木・金 10:00~13:00 16:00~19:00
土 10:00~14:00 休診日=水・日・祝
電話0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL.46-3281 FAX.46-3285

整形外科・皮膚科・リウマチ科・リハビリテーション科
医療法人 大岩整形外科・皮フ科
院長 大岩俊久 豊橋市大橋通二丁目115 電話55-2100

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店
高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

本の豊川堂
本店54-6688番/カルミア店55-2810番/アビタ店54-6351番

煉物専科
ちよこ花でん
ココラフロント ホテルアークリッシュ 1F

ISO9001 ISO14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

Storyteller tells the Story
物語コーポレーション

JEANS SHOP YAMATO
豊橋 つつじが丘 / 豊川 千歳通り

生活にファインクオリティ
sala

広告募集

TICKET CENTER



チケットの購入・お問合せ
プラットチケットセンター

電話・窓口
0532-39-3090 [休館日を除く 10:00-19:00]
オンライン
http://toyohashi-at.jp [24時間受付・要事前登録]

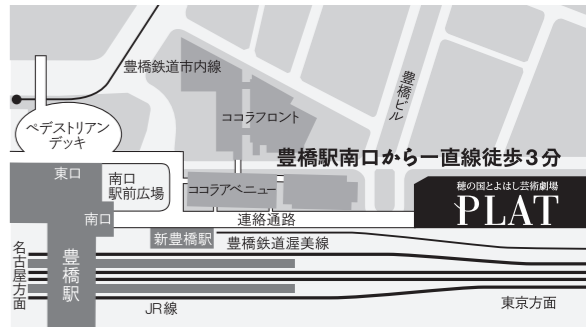


プラットフレンズ募集
入会金・年会費無料

特典
1 公演情報をメールでご案内します。
2 インターネットでチケット予約ができます。
3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページから登録いただけます。

U24・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。
料金
U24[24歳以下対象]:公演ごとに指定する席種の半額
高校生以下:一律1,000円
購入方法
各公演の一般発売初日から窓口にて取扱い。
その他
本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。
座席の指定はできません。要・入場時身分証明書提示。



千440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話=0532-39-8810[代表]
開館=9:00-22:00 休館日=第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT